

中山間地域における自発的なコミュニティの維持とその暮らしに関する研究

家の解体 畑 コミュニティ

正会員 ○ 小池 幸平*

正会員 黒木 宏一**

内発的 外発的 自発的な維持

■ はじめに

中山間地域の高齢化は急激に進む。日本の各所で限界集落が増加し、コミュニティの維持に関する問題は深刻な陰を落とす。行政はその対策のために様々な事業を展開しているが、それがこれまでの生活のやり取りまで考慮して計画される場合は少ない。多額の資金を投入した事業も、住人の生活が改善されているとは言いがたい。本研究では、前述した外発的な維持に対して、集落内の住民による内発的で自発的なコミュニティの維持の方法を検討することを目的とする。

■ 調査概要

新潟県柏崎市旧高柳町0町を対象とする。0町は1965年以降の交通整備から急激に商店と人口が減少し、1970年に全国過疎地域復興指定町となる。2004年の中越地震から更に若年層の人口が減少していき限界集落指定を受ける。0町は商店街を内包する高柳町の中心市街地であったが、現在商いを続ける店舗は189世帯中22世帯となり既に商店街の形を成していない(図1)。本研究では、0町の商店街を形成していた3区と4区を中心に、住民から集落内の人付き合いとコミュニティの変化に関するヒアリング調査を実施した(2015年10月～2016年3月)。

■ 集落の空間の変化

人口の減少に伴い空き家や空き地が増加し、年間10軒あまりの住宅が解体されている。集落では増え続ける空き地を、住民が畑に転用していく現象が見られた。転用された畑はいずれも、これまでのコミュニティを維持する役割

を持ち合わせている。

■ タイプ別の畑の特性(表1)

家が解体された跡地を畑に転用する現象について、その行為が起きた経緯と、そこで行われるやり取りに着目して分析を行った。家が畑に転用された経緯から以下の5つのタイプに分けた。

【血縁型】親族の家が密集した場所。以前は、親族同士で仕事や農業に従事していて、互いの仕事を手伝い合いながら過不足なく生活することができた。そのため、当時は近所付き合いには消極的だった。親族の一人が亡くなると、その土地を相続して畑に転用するようになる。畑仕事に通りがかりの人と会話する機会が増えたり、近所の家に上がってお茶を頂いたりするようになる。畑に転用してから、親族間だけの閉じた人付き合いから、近所付き合いによって過不足を補い合う生活に変化した。

【非血縁型】商店街沿いの場所。以前は、同じ家の中で、歯医者や床屋が仕事をしていて、仕事以外でも互いの家に入り浸るような非常に親しい間柄だった。歯医者や床屋が亡くなった後に、その土地を買い取って畑に転用する。当人は畑仕事の経験がなく、床屋は下で畑を耕している住民から教えを受けながら作業する。商売上の付き合いしか持たなかった住民が、畑に従事するようになり、近隣との付き合いが生まれた。

【開放型】住宅地にある場所。以前は、家の近くに小さな畑を営む住宅地だった。近隣の住戸が次々に解体されていき、住宅地で畑を営む人はごく少数となる。中越地震

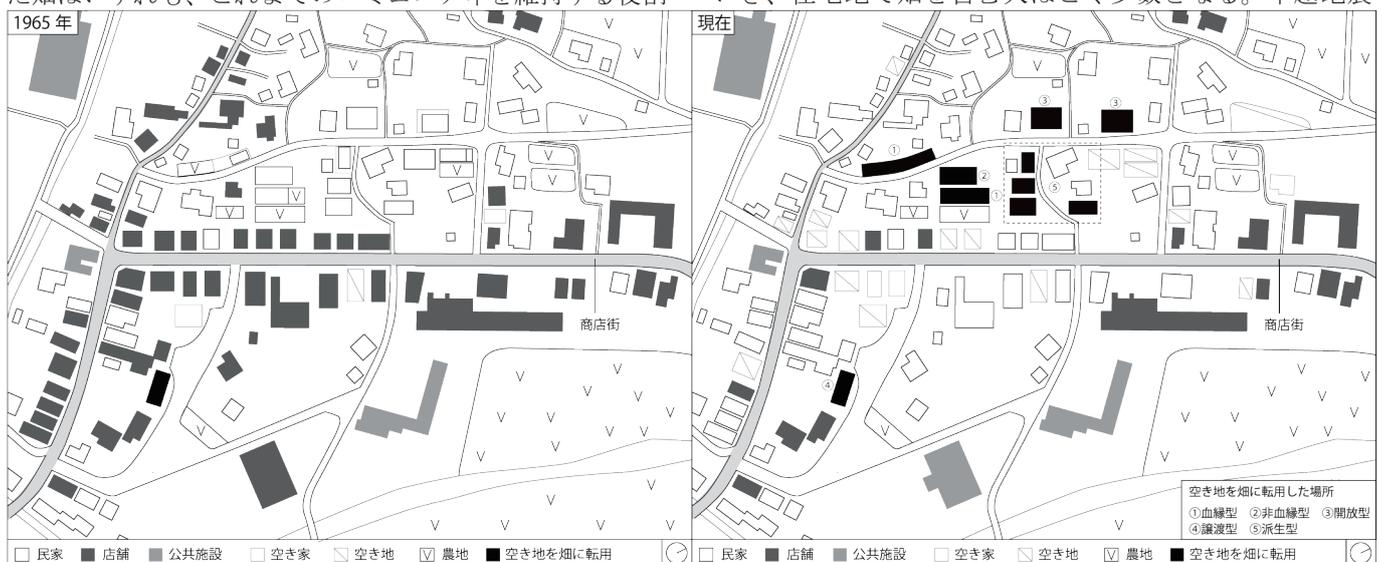


図1. 1965年と現在の土地利用の比較

から家が半壊指定を受け解体され、同年に息子夫婦が住む市街地に移住した。畑仕事のために村に訪れる機会は月2～3回ほどで、それ以外の期間は近所の住民に畑を解放している。解放された畑には近所の人が集まり、野菜を育てたり、談笑したりする姿が見られる。畑を解放することで、以前と変わらない畑を介した人のつながりが維持されている。

【譲渡型】元は農地だった場所。以前は、互いに農地を所有しており、仕事の合間に集まって談話する関係だった。B氏が体を悪くし始めてからは、畑仕事の合間にB氏宅に上がり談話するようになる。B氏の親族が亡くなり、その土地を相続すると、土地を荒らさないためにA氏に譲り渡す。以降は、そこを畑に転用し利用する。A氏が畑を耕した後に、B氏から譲り受けた畑を耕し、それが終わるとB氏宅に様子を伺いに行く。体が不自由な人に代わり、手の回らない土地を自由に利用してもらうことで、土地を荒らさずに維持できる。また、家の近くに空き地がある場合、畑に転用された場所は人付き合いの場に変わる可能性がある。

【派生型】商店街に面した店が並ぶ場所で、裏庭から派生して生まれた畑である。以前は、商いの合間に家の裏庭を利用していた。やがて商店街が衰退し店を畳むと、裏庭が近所付き合いの中心となっていく。近所の人が亡くなり家が解体されると、裏庭が拡張されて、家の跡地に畑がされるようになる。それぞれの家が週3回ほど利用し、畑に

向かう際に近所の家に誘いに行く。跡地に出来た畑は共同農地になり、人が集まり談話する場として機能している。商いの衰退に合わせるように、商いを介した人付き合いから、農地を介した人付き合いに柔軟に転換している。

■畑によるコミュニティのつなぎ方とその効果

空き地を畑に転用する動きは、住民が亡くなるか、家を壊すことで出来た空き地を利用していた。そこで始められた畑は、いずれも失った住民間のやり取りを補完する効果を持っている。ただし、どこでも畑にすれば良い訳ではなく、過去から現在に至るまでの経緯を読み解くことが重要である。畑は事前に何かを準備する必要が無く、住民の生活や人付き合いに合わせて始めることができ、維持管理も容易い。行政が行う大仰な事業に頼らずとも、住民の生活に合わせて始めることが出来る畑には、住民間のコミュニティは維持していける可能性を秘めていると言える。

■まとめ

行政が行う事業は、長い間生活を営んでいく過程で生まれた住居間のやり取りやマイクロな生活の場まで考慮されて計画されるとは言いがたい。行政に集落の行く末を託すような外発的なコミュニティの維持ではなく、そこに生きる人達が集落の変化に対応していける内発的で自発的なコミュニティの維持を考えていく必要がある。そのためには、住民の生活が過去から現在に至るまでの経緯を踏まえた上で、現状の暮らしに合わせた住民が手軽に行える計画を考えることが重要である。

表1.各タイプ毎の畑の特性(各タイプ名の数字は図1と対応)

タイプ	①血縁型	②非血縁型	③解放型	④譲渡型	⑤派生型
場所	住宅地	商店街沿い	住宅地	元農地	商店街沿い
所有者	血縁者に相続	元同業者が買い取る	変化なし	変化なし	友人が買い取る
利用頻度	週5回程度	週5回程度	月2～3回程度	週3回程度	各住戸、週3回程度
動機	親戚の土地を荒らさないため縮小した田畑の代わりとして畑に転用 老後の趣味	同じ家で仕事をした経験 近所の人に勧められて始める 老後の趣味	中越地震で家が半壊指定を受け解体 同年、柏崎市の息子夫婦宅に移住 友人と談話するため畑に転用	かつて共に農業を営んでいた友人に、親族の家の跡地を無償で譲渡し、土地が荒れないように畑に転用される。	商いの傍らに利用していた裏庭を、商いを辞めた後に畑に転用される。近所の家が解体された後に、共同農地として利用。
畑を介した人付き合い(過去)					
	□家 ■畑 ノード:親戚宅/職場	□家 ■畑 ノード:職場/友人宅	□家 ■畑 ノード:小規模な畑	□家 ■畑 ノード:畑/家	□家 ■畑 ■裏庭 ノード:店/裏庭
	①材木店、大工仕事の傍ら、それぞれの家を持つ畑を耕す。 ②親戚間の付き合いが濃く、仕事や集落行事以外での近所付き合いには消極的。	①一つの家屋に二つの職種が入っており、歯医者や床屋の家の二階を借りて診療所のように利用していた。 ②仕事やプライベートでも頻りに関わり、お互いの家の間に小道を作る。	①どの家も兼業農家で、家の近くに小さな畑を持っている。 ②畑で取れた野菜をお裾分けし合い、互いに足りない物を補っていた。	①村が開拓されるまで、この一帯は田んぼで、互いに農業仲間だった。 ②村の開拓が進み、住宅地となる中、一部の農地が残り、そこを畑に転用した。 ③以降も互いに関係が続き、畑を耕した後に、家が上がっていた。	①商店に品を届けたいのに家に上がり語らう。 ②商いの傍ら、裏庭で野菜や花を育てる。 ③互いに畑で作った野菜をお裾分けする。 ④村の山間部にある田畑を耕しに行く。
畑を介した人付き合い(現在)					
	□家 ■畑 ノード:親戚宅/畑	□家 ■畑 □空き地 ノード:農地/家	□家 ■畑 □空き地 ノード:畑	□家 ■畑 ノード:畑/家	□家 ■畑 ■裏庭 ノード:共同農地
	①仕事を辞め、畑も縮小する。亡くなった親族の跡地を畑に転用するようになる。 ②転用した畑に出向く時間が多くなり、畑仕事中に近所の人と話す頻度が増える。	①歯医者や床屋が亡くなり、その跡地を床屋が買い取る。 ②下の畑をしている人と一緒に畑仕事をして、休憩する場合はどちらかの家に行く。 ※親族が亡くなった後の跡地を畑に転用した場所。	①所有者が集落に訪れない間、畑は周辺の家に解放し、近所の社交の場となる。 ②畑の傍らに通りがかりの人と話し、そのまま家に招き談話する。 ③所有者が帰って来ると、近所の人に、自宅で作った料理を配る。	①A氏の畑を耕し、その傍らに譲り受けたB氏の畑も耕す。 ②畑仕事が終わると、B氏宅に上がり「体調はどうだい？」と様子を伺いに行く。	①裏庭は畑に変わり、そこで談話する。 ②家の跡地は共同農地として利用され、小道を通りがかる人も足を止め、談話する。 ③共同農地が増えた為、みんなが使う農具を保管する小屋を作る。 ④残された倉庫を再利用し使い続ける。

*新潟工科大学 大学院工学研究科
**新潟工科大学工学部 建築学科 准教授・博士(工学)

*Graduate student, Niigata Institute of Technology.
**Associate Professor, Department of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Institute of Technology, Dr.Eng.